

博士(文学) 沢 辺 裕 子

学位論文題名

A Giant in Versatility: The Literary Achievements of Vikram Seth

(多才さの巨人-ヴィクラム・セイトが文学作品で達成したこと)

学位論文内容の要旨

本論文は、カルカッタのヒンズー教徒の家に生まれたヴィクラム・セイトの多才にして多作の文学的業績を、総合的に評価しようとする論考である。ヴィクラム・セイトは、インドの英国式パブリック・スクールを出た後、イギリスのオックスフォード大学で学士号を、カリフォルニアのスタンフォード大学で修士号を取得した。スタンフォードの博士課程に在籍中、中国の南京大学にも留学している。その多様な文化背景を反映するかのよう
に、セイトは様々なジャンル---詩、唐詩の翻訳、オペラのためのリブレット、絵本、旅行記、韻文小説、散文小説、伝記---に挑戦し続け、作品の舞台もカリフォルニア、中国、インド、ロンドンなど、多岐に渡る。

第1章では、詩人としてスタートしたヴィクラム・セイトの詩作品を取りあげている。詩集『マッピングズ』、『慎ましい執政官の庭』、『今夜眠るあなたたちみんな』と動物寓話『あちらこちらの獣の物語』を、形式と態度とテーマの観点から論じている。セイトは韻律と押韻を使った伝統的な詩を書いた。詩の対象に深く関わるといよりも、距離を置いて対象を眺めるという態度をとる。さらに、詩の終わりに皮肉を用意していたり、重い主題をからかうような軽い調子で語ったりすることも彼の詩の特徴である、と説明している。

第2章では、セイトが行った唐時代の偉大な三人の詩人、王維、李白、杜甫の翻訳を取りあげ、アーサー・クーパーやデビッド・ヒントンといった著名な翻訳家の訳と比較しながら検討している。セイトの場合には、翻訳に選んだ詩が、別れや孤独を扱ったものが多いという特徴が見られる。男女の愛よりは、男同士の友情、それも別れを惜しむ詩、あるいは思い出の詩であるのが特徴であると指摘している。

第3章では、ギリシア神話の『アリオンといるか』をオペラのリブレット及び絵本として再話した作品を取りあげている。リブレットでは、韻律と押韻のバリエーションが、登場人物の感情の起伏にあわせてみごとに使いこなされている点や、絵本では、リブレットと比べて物語が単純化されてはいるが、ジェーン・レイの挿絵によって補われる部分、さらにリブレットにはないが絵本では描かれている部分などに注目し、リブレットとの比較を行っている。

第4章では、中国新疆ウイグル自治区からチベットとネパールを経てインドに至る旅行の旅行記『ヘヴン・レイクより』を取りあげ、語り手のペルソナ、視点、感じ方の観点か

ら論じている。旅人であり語り手であるセイトは、多文化に育った生立ちと詩人としての感じ方によって、ふつうの人が見逃しがちな細かい点にまで気づき、異なるものを受け入れ、他者の立場に立って想像するというユニークな視点を持っていると論じている。

第5章では、ソネット形式で書かれた韻文小説『ゴールデン・ゲイト』を取りあげ、孤独で愛を求めるサンフランシスコの五人の男女の他者との関わり方が描かれているとして、その人間模様をくわしくたどっている。人間分析の小説と呼ぶべきこの作品では、過度の情熱が不幸を招くというテーマが展開されているとして、物語に即して論じている。

第6章から第8章までは、長編小説『スタブル・ボーイ』を取りあげている。第6章では、ヒンズー教徒の家の末娘ラタと彼女の三人の求婚者との関係というメインプロットについて、三本のより糸を一本ずつにほどいてゆくように、順次検証して、ラタの心の動きを跡づけている。第7章では、メインプロットに平行していくつも存在するサブプロットを取りあげて分析し、それらが、メインプロットのラタが最終的に誰を結婚相手に選ぶのかを理解するために、鏡のような役割をする教訓的な物語になっていると論じている。第8章では、再び小説のメインプロットにもどり、ラタがハレーシュとの結婚を選択するまでのプロセスを、ラタの感性や柔軟な心の動きに注目しながらたどっている。ラタは心を落ち着かせるためにしばしば猿のいる大木の菩提樹のところに行くのだが、そこでラタが観察する猿たちの行動は、身勝手な行動は痛みを伴う結果を招くというもうひとつの教訓を示唆する。これによって、穏やかなハレーシュとの愛を選ぶことになる。シェイクスピアの喜劇が結婚で終わるように、『スタブル・ボーイ』もラタとハレーシュの結婚で幕が降ろされ、それは喜劇と同じように、ほとんどの登場人物を包み込んで幸せな気持ちにさせるような終わり方になっていると、筆者は結んでいる。

第9章では一人称で語られる自叙伝的小説『イコール・ミュージック』を取りあげている。恋人を失って以来、音楽の他には精神的に空虚な生活を送る主人公マイケルが、その魂を音楽によって癒されてゆく過程を追う。一人称小説であることにより、読者は、マイケルの言動と周囲の人々の反応の機微から、直接語られないことまでも読み取ることを要求されている。舞台もロンドン、ウィーン、ヴェニスと動くが、やはりここでも物語に統一を与えているのは、主にマイケルの失敗の中に見られる「ゆきすぎた情熱が招く悲劇」というテーマである。筆者は、セイトの先の二つの小説との繋がりにも触れ、セイトの作品に流れるテーマをより深く立体的に理解することに成功している。

結論では、多岐にわたるセイトの文学活動の全貌を明らかにしようという意図で論を進めてきたが、そのために時として木を見て森を見ずという結果になったかもしれないが、少なくとも、研究する人の少ないこの作家について、その全貌を明らかにし、その多岐にわたる作品の中に一貫して流れている「ゆきすぎた情熱が招く悲劇」というテーマを見つけることはできた、と結んでいる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 長 尾 輝 彦
副 査 教 授 高 橋 英 光
副 査 助 教 授 瀬 名 波 栄 潤

学 位 論 文 題 名

A Giant in Versatility: The Literary Achievements of Vikram Seth

(多才さの巨人-ヴィクラム・セイトが文学作品で達成したこと)

審査委員会は、本論文が提出されて以後、6回にわたって委員会を開催し、申請論文を慎重に精読して審査するとともに、口述試問を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、本論文に対する以下の記述のような評価に鑑み、審査委員全員が一致して、沢辺裕子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達し、文学研究科教授会に報告した。教授会は、この報告に基づき審議を重ね、これを承認したものである。

本論文は、ヴィクラム・セイトの全作品を詳しく鑑賞し、批評する。その批評姿勢は、作品を精細に見ること---作品を精細に見て、作家がその作品で何をしているのかを理解しようとすることである。ひとつの文学批評の理論を実践するために作品を選ぶのではなく、ひとりの作家の多様な作品を、あらゆる角度からできる限り詳細に見てゆくことによって、諸作品の中に暗示されている作品のテーマを明らかにしてゆくことを目的としている。

あくまでも作品に忠実という姿勢で論を進めているので、作品世界のバラエティーをそのまま反映するような論文になっているが、その中から、セイトのどの作品の中にも流れているテーマとして、「ゆきすぎた情熱がもたらす危険や悲劇」というテーマを抽出することに成功している。

本論文の成果は、ヴィクラム・セイトの、詩や小説、児童文学、旅行記、さらには翻訳文学、韻文小説といった多彩な作家活動の全貌をたどり、しかもその一方で、個々の作品を丹念に鑑賞し詳細に解釈しようとする姿勢を貫いていることである。新進活躍中の作家であるために、先行研究としては、文芸誌に出た作品の書評が主であって、まだ本格的な研究書は出ていない。このような状況の中で、ヴィクラム・セイトのほぼ全作品を視野に収めた本論文の成果は、国内はもとより世界的に見ても、パイオニア的な性格を持っていると言える。

論文の構成について言うなら、「ゆきすぎた情熱が招く悲劇」というテーマを見つけてはいるものの、全体としては、「統一」よりも「多様」に傾きすぎたきらいがある。しかしそれは、多彩な作家活動の全貌を明らかにしようとする目的から当然出てくる結果であ

る。また、いわゆるポスト・コロニアル文学の典型とも言える作家を扱いながら、ポスト・コロニアル文学全体の視野の中でこの作家を位置づけるという試みを行うところまで行っていない。またこの作家が基盤においている英文学とのつながりについては、シェイクスピアやジェイン・オースティンとのつながりを指摘しているが、じゅうぶんなものとは言い難い。しかしながら、これらは今後の課題として、筆者の今後の研究に多くの発展の余地を残していると言うべきであろう。また近年さかんになっている「トラベル・ライティング」と呼ばれる文学の研究領域があるが、このような研究に発展していく余地も残している。しかしここでは、この多作な現代作家のほぼ全作品を掌握したという点に高い評価が与えられる。